

ユーモアの面白さと受け手の居住地域の関係を探る

The relationship between humor and its recipient's residential area

中村 太戯留^{†‡}

Tagiru Nakamura

武蔵野大学{[†]データサイエンス学部, [‡]教養教育リサーチセンター}

{[†] Faculty of Data Science, [‡] Research Center for Liberal Education}, Musashino University

tagiru_n@musashino-u.ac.jp

概要

ユーモア理解の地域差について、ユーモア理解の「見だし」理論による説明の可能性を検討した。具体的には、保護フレームないし関連性がユーモアの面白さに与える影響について、ひねり、ユーモア態度、居住地域による変調の可能性を実証的に検討した。その結果、居住地域により関連性を感知するひねりやユーモア態度に違いがあり、保護フレームの作用と合わせて、ユーモアの面白さに影響する可能性が示唆された。

キーワード：ユーモア、地域、保護フレーム、関連性

1. はじめに

ユーモアには地域差があり、関東ではシュール、スマート、計算高いなどの特徴があるのに対して、関西では知的、品がある、冷静などの特徴があるという違いが報告されている(Vaage, 2024)。このことから、関東に居住する人々には、少し考えるとわかるような、シニカルでブラックな(他者を落とすような)ユーモアが好まれる可能性が考えられる。一方、関西に居住する人々には、感覚的ですぐにわかるような、カラっとした(むしろ自身を落とすことでその場の会話を盛り上げるような)ユーモアが好まれる可能性が考えられる。

ユーモアを表出するという観点から、攻撃的ユーモア、遊技的ユーモア、そして支援的ユーモアという三種類のユーモア態度に分類できると提案されている(上野, 1993; 宮戸・上野, 1996)。攻撃的ユーモアは、毒のある笑い、皮肉、過激な冗談、ブラックユーモア、人を傷つけるような笑いなどが該当する。遊技的ユーモアは、単純でわかりやすいユーモア、人のものまね、だじゃれ、ささやかな日常ネタ、人間くささのある笑い話などが該当する。支援的ユーモアは、人を励ますような笑い、人を救うようなユーモア、嫌なことを笑い飛ばすようなユーモア、気がめいるときに自分を励ますようなユーモアなどが該当する。この観点から考えると、関東のユーモアは攻撃的なものが好まれ、関西のユーモアは遊技的ないし支援的なものが好まれると予想される。

ユーモアを理解するという観点から、自分は守られているという認識のときに危ない知らせを得るとユー

モアが生じることが提案されている(中村, 2021, 2025)。なお、自分は守られているという認識は「保護フレーム」(Apter, 1992, 2007)、危ない知らせは「関連性」(Sander et al., 2003)を平たく表現したものである。

保護フレームは、「興奮を追い求めている状態では、心理的な保護フレームが存在している。それは、危険な断崖の少し内側に柵があるようなイメージである。(中略)例えば、スカイダイビングしているヒトのパラシュートが開くと墜落死を物理的に防ぐだけでなく、心理的な保護フレームが機能して、宙に浮いていていわば危険に囲まれているにもかかわらずそのヒトは安全だと感じる」(Apter 2007: 29)と定義されている。

関連性は、「ある事柄が、自分の目標達成、自分の欲求実現、自分が有する幸福や属する種の幸福の維持に(ポジティブであれ、ネガティブであれ)有意な影響を及ぼすならば、それは関連性のある事柄である」(Sander et al. 2003: 311)と定義されている。

この観点から考えると、関東では少し考えるとわかるようなひねったネタにおいて関連性を感知しやすいと予想される。一方、関西では感覚的ですぐにわかるようなネタにおいて関連性を感知しやすいと予想される。また、攻撃的ユーモアは、自分は守られているという認識(保護フレーム)が低下し、遊技的ないし支援的ユーモアでは上昇すると予想される。そして、ユーモアの面白さの度合いはこれらの影響を受けると予想される。

本稿では、ユーモア理解の地域差について、ユーモア理解の「見だし」理論による説明の可能性を検討した。具体的には、保護フレームないし関連性がユーモアの面白さに与える影響について、ひねり、ユーモア態度、居住地域による変調の可能性を実証的に検討した。

2. 方法

実験参加者は104名(女性52名、男性52名)であった。年代は、20代は26名、30代は33名、40代は24名、そして50代は21名であった。居住地域は、関東(茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、

そして神奈川県（1都6県）が63名、関西（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、そして和歌山県の2府4県）が41名であった。

ユーモアの刺激としては、前フリとオチから構成される10個を用意した。各刺激の行数は平均4.5行（範囲：2～8行）、文字数は平均88.3文字（範囲：47～190文字）であった。その刺激は、ひねりがあって少し考えるとわかるようなシニカルで少しブラックな小咄（以下、「思考」タイプと記載）が5個と、感覚的ですぐにわかるようなカラっとした小咄（以下、「感覚」タイプと記載）が5個の合計10個であった。そのうち半数は攻撃的なユーモア（以下、「攻撃」タイプと記載）、残り半数は遊技的ないし支援的なユーモア（以下、「遊技」タイプと記載）であった。

「思考×攻撃」タイプの刺激例：「婚約を解消したときに、彼女ははどうしたんだって？」「エンゲージリングを小包で送り返してきてね、表に“ガラスにつき取り扱い注意”って書いてあったんだ……」（立川, 1999: 127）

「思考×遊技」タイプの刺激例：「車掌さん、ちょっとかがいますが、次の駅でジュースを売ってますか？」「売ってます」「新聞もあるんでしょうね」「あります」「サンドイッチは……」「あります」「何分停車ですか？」「通過です」（立川, 1999: 621）

「感覚×攻撃」タイプの刺激例：あなたは友人と歌劇で歌っていました。公演中、しばしば音程を外してしまいました。講演後、友人から言われました。「素晴らしい歌声ね」（中村他, 2022: 3）

「感覚×遊技」タイプの刺激例：オライリーは武装強盗の罪で裁判を受けた。「無罪！」と陪審員が発表した。「素晴らしい！」とオライリーは言い、「じゃあ、あの金は返さなくていいんだな？」（Suls, 1972: 90）

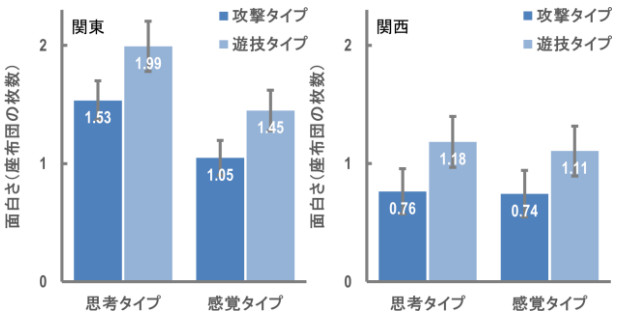
実験装置としては、ウェブブラウザを用い、刺激の提示順序は実験参加者ごとにランダム化した。各刺激は1行ずつ提示し、クリックすると次の行が順に提示されるようにした。会話形式の場合は発話ごとに改行を基本としたが、発話が長い場合には途中で改行した。続いて、面白さの度合い、保護フレームの度合い、そして関連性の度合いを「0」から「5」の6段階で回答してもらった。面白さに関してはお笑い番組における面白さの評価のしかたに倣って座布団の枚数をイメージして回答してもらった（座布団なし～座布団5枚）。保護フレームに関しては、自身の心理的な安全性をイメージしつつ、小咄の内容が自分ごとで安全性が低ければ「0」、他人ごとで安全性が高ければ「5」と回答しても

らった。関連性に関しては、自身が生きているということにポジティブであれネガティブであれ影響があるかどうかをイメージしつつ、小咄の内容に無関心であれば「0」、関心が強ければ「5」（ポジティブであれば興味、ネガティブであれば警戒）と回答してもらった。また、例として、自身が離婚直後に離婚ネタを聞いたら「自分ごと」で「警戒あり」が想定されること、自身が夫婦関係良好で不倫ネタを聞いたら「他人ごと」で「興味あり」が想定されることを説明時に例示し、回答する際のイメージづくりの参考としてもらった。

3. 結果

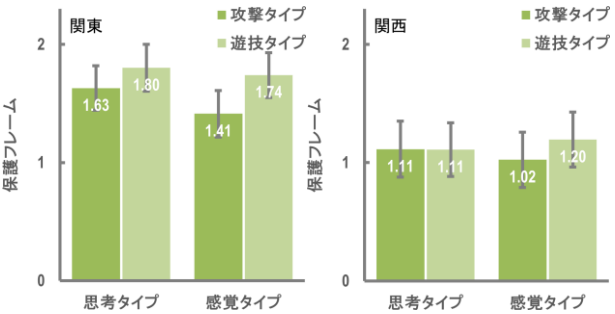
提示した刺激はユーモアを有することが確認された。すなわち、ユーモアの面白さの平均値に関して、関東の「思考×攻撃」タイプは1.53枚、「思考×遊技」タイプは1.99枚、「感覚×攻撃」タイプは1.05枚、そして「感覚×遊技」タイプは1.45枚であった（図1）。一方、関西の「思考×攻撃」タイプは0.76枚、「思考×遊技」タイプは1.18枚、「感覚×攻撃」タイプは0.74枚、そして「感覚×遊技」タイプは1.11枚であった（図1）。2（関東、関西）×2（思考、感覚）×2（攻撃、遊技）×2（女性、男性）×4（20, 30, 40, 50代）要因の分散分析を実施した。居住地域（関東、関西）の主効果が有意で（ $F(1, 88)=5.605, p<0.05$ ）、関東の平均値は座布団1.49枚、関西は0.91枚と推定された。ひねり（思考、感覚）の主効果が有意で（ $F(1, 88)=14.026, p<0.001$ ）、思考タイプは座布団1.35枚、感覚タイプは1.05枚と推定された。ユーモア態度（攻撃、遊技）の主効果が有意で（ $F(1, 88)=28.652, p<0.001$ ）、攻撃タイプは座布団0.99枚、遊技タイプは1.41枚と推定された。居住地域とひねりの交互作用が有意で（ $F(1, 88)=6.69, p<0.05$ ）、関東の思考タイプは座布団1.75枚、関東の感覚タイプは1.23枚、関西の思考タイプは0.96枚、関西の感覚タイプは0.86枚と推定された。性別や年代の主効果や交互作用は認められなかった。

図1 ユーモアの面白さの東西比較



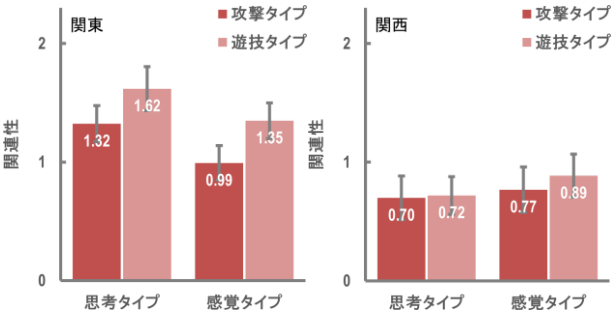
提示した刺激の理解において保護フレームが機能することが確認された. すなわち, 保護フレームの度合いの平均値に関して, 関東の「思考×攻撃」タイプは1.63, 「思考×遊技」タイプは1.80, 「感覚×攻撃」タイプは1.41, そして「感覚×遊技」タイプは1.74であった(図2). 一方, 関西の「思考×攻撃」タイプは1.11, 「思考×遊技」タイプは1.11, 「感覚×攻撃」タイプは1.02, そして「感覚×遊技」タイプは1.20であった(図2). 2(関東, 関西) × 2(思考, 感覚) × 2(攻撃, 遊技) × 2(女性, 男性) × 4(20, 30, 40, 50代)要因の分散分析を実施した. ユーモア態度(攻撃, 遊技)の主効果が有意で($F(1, 88)=6.821, p < 0.001$), 攻撃タイプは1.28, 遊技タイプは1.44と推定された. 居住地域, ひねり, 性別, 年代に関して, 主効果や交互作用は認められなかった.

図2 ユーモアの保護フレームの東西比較



提示した刺激の理解において関連性を感知していることが確認された. すなわち, 関連性の度合いの平均値に関して, 関東の「思考×攻撃」タイプは1.32, 「思考×遊技」タイプは1.62, 「感覚×攻撃」タイプは0.99, そして「感覚×遊技」タイプは1.35であった(図3). 一方, 関西の「思考×攻撃」タイプは0.70, 「思考×遊技」タイプは0.72, 「感覚×攻撃」タイプは0.77, そして「感覚×遊技」タイプは0.89であった(図3). 2(関東, 関西) × 2(思考, 感覚) × 2(攻撃, 遊技) × 2(女性, 男性) × 4(20, 30, 40, 50代)要因の分散分析を実施した. 居住地域(関東, 関西)の主効果が有意で($F(1, 88)=6.365, p < 0.05$), 関東の平均値は1.31, 関西は0.73と推定された. ユーモア態度(攻撃, 遊技)の主効果が有意で($F(1, 88)=11.798, p < 0.001$), 攻撃タイプは0.92, 遊技タイプは1.13と推定された. 居住地域とひねりの交互作用が有意で($F(1, 88)= 8.292, p < 0.01$), 関東の思考タイプは1.46, 関東の感覚タイプは1.16, 関西の思考タイプは0.68, 関西の感覚タイプは0.78と推定された. ひねり, 性別, 年代の主効果や交互作用は認められなかった.

図3 ユーモアの関連性の東西比較



提示した刺激において, 保護フレームの度合いのない関連性の度合いがユーモアの面白さの度合いに影響することが確認された. すなわち, パス解析を実施したところ(図4), 関連性からユーモアの面白さへの有意なパスが認められ($p < 0.001$), 「思考×攻撃」タイプのパス係数は0.825, 「思考×遊技」タイプは0.687, 「感覚×攻撃」タイプは0.849, そして「感覚×遊技」タイプは0.798であった(残差は順に0.454, 0.562, 0.458, 0.505). なお, 保護フレームからユーモアの面白さへの有意なパスは, 「思考×遊技」タイプにおいてのみ認められ, パス係数は0.212であった($p < 0.01$). 地域別にパス解析を実施したところ, 関東では(図5a), 関連性からユーモアの面白さへの有意なパスが認められ($p < 0.001$), 「思考×攻撃」タイプのパス係数は0.798, 「思考×遊技」タイプは0.682, 「感覚×攻撃」タイプは0.807, そして「感覚×遊技」タイプは0.777であった(残差は順に0.515, 0.595, 0.519, 0.532). なお, 保護フレームからユーモアの面白さへの有意なパスは, 「思考×遊技」タイプにおいてのみ認められ, パス係数は0.207であった($p < 0.05$). 一方, 関西では(図5b), 関連性からユーモアの面白さへの有意なパスのみが認められ($p < 0.001$), 「思考×攻撃」タイプのパス係数は0.851, 「思考×遊技」タイプは0.702, 「感覚×攻撃」タイプは0.921, そして「感覚×遊技」タイプは0.830であった(残差は順に0.383, 0.552, 0.372, 0.477).

図4 ひねりやユーモア態度による面白さの変調

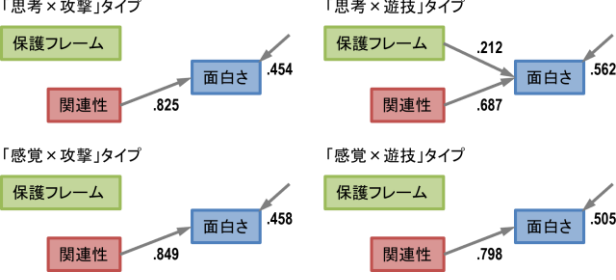
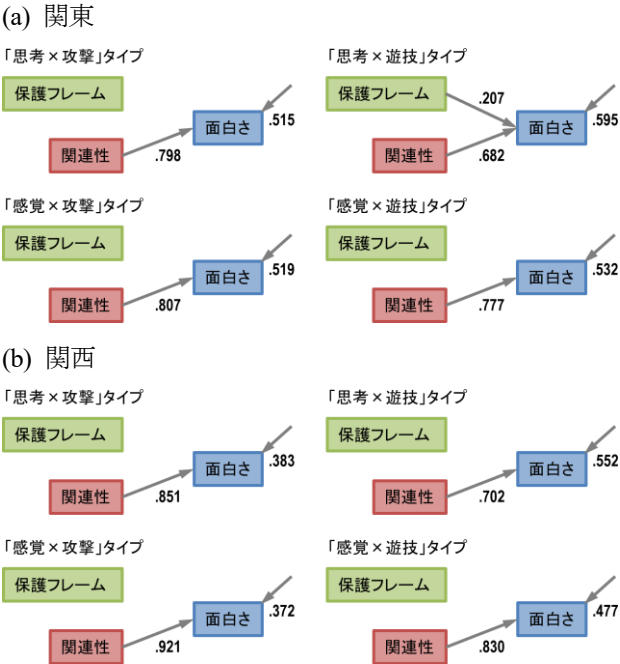


図5 居住地域による面白さの変調



4. おわりに

本稿では、ユーモア理解の地域差について、ユーモア理解の「見だし」理論による説明の可能性を検討した。具体的には、保護フレームないし関連性がユーモアの面白さに与える影響について、ひねり、ユーモア態度、居住地域による変調の可能性を実証的に検討した。

ユーモアの面白さは、基本的には関連性から影響を受けていることが確認された。居住地域、ひねり、ユーモア態度、性別、そして年代の違いによらず一貫していた。これは、ユーモア理解の「見だし」理論(中村, 2021, 2025)の関連性に関する見解と整合する結果であった。

ユーモアのタイプとしては、少し考えるとわかるような思考タイプは、感覚的ですぐわかるような感覚タイプよりも面白さが強くなっていた。また、単純でわかりやすい遊技的ユーモアは、人を傷つけるような攻撃的ユーモアよりも面白さが強くなっており、保護フレームの度合い、および関連性の度合いも同様に強くなっていた。そのため、遊技的ユーモアにおいては、保護フレームが機能した状態での関連性の感知により強めの面白さが生じた可能性が考えられた。これは、「見だし」理論(中村, 2021, 2025)と整合する結果であった。

地域差として、面白さの度合いは、関西よりも関東の方が高くなっていた。関連性の度合いも関西よりも関東の方が高くなっており、この違いが面白さの度合いを変調している可能性が考えられた。なお、関西はボケ

とツッコミの文化(Vaage, 2018)であるため、オチ(ボケ)のみでツッコミのない小咄と関連性を感知しづらく、面白さが関東より低く変調された可能性も考えられる。

関東では少し考えるとわかるような思考タイプの面白さが特に高くなっていた。また、関東では少し考えるとわかるような思考タイプの関連性が高いのに対して、関西では感覚的ですぐわかるような感覚タイプの関連性が高いという特性がみられた。すなわち、このような関連性感知の特性の違いが、思考タイプのユーモアの面白さの度合いを変調している可能性が考えられた。

これらの保護フレームと関連性感知の効果の総合として、関東における「思考×遊技」タイプのユーモアの面白さが最も高くなっていた可能性が考えられた。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 JP20K13034 の助成を受けた。ここに感謝の意を表する。

文献

Apter, M. J. (1992). *The dangerous edge: The psychology of excitement*. The free press.

Apter, M. J. (2007). *Danger: Our quest for excitement*. Oneworld.

宮戸 美紀・上野 行良 (1996). ユーモアの支援の効果の検討 社会心理学研究, 67(4), 270-277.

中村 太戯留 (2021). ユーモア理解の「見だし」理論 語用論研究, 23, 34-50.

中村 太戯留 (2025). 保護フレームと関連感知によるユーモア理解の動的語用論 田中 廣明 他(編) 動的語用論の構築へ向けて(第4巻) (pp. 132-151) 開拓社

Nakamura, T., Matsui, T., Utsumi, A., Sumiya, M., Nakagawa, E., & Sadato, N. (2022). Context-prosody interaction in sarcasm comprehension. *Neuropsychologia*, 170, 108213, 1-11.

Suls, J. M. (1972). A two-stage model for the appreciation of jokes and cartoons: An information-processing analysis. In Goldstein, J. H., & McGhee, P. E. (Eds.), *The psychology of humor: Theoretical perspectives and empirical issues* (pp. 81-100), New York: Academic Press.

Sander, D., Grafman, J., & Zalla, T. (2003). The human amygdala: An evolved system for relevance detection. *Reviews in the neurosciences*, 14(4), 303-316.

立川 談志 (1999). 家元を笑わせろ ディーエイチシー

上野 行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係 心理学研究, 64, 247-254.

Vaage, G. (2018). やりとりから生まれる面白さについて 定延 利之(編著) 限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究 (pp. 110-127) ひつじ書房

Vaage, G. (2024). ボケとつつこみの言語学(第4回) ひつじ書房 <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/category/rensai/bok-e-to-tukkomi/>